

桜井市

# 平成30年度国庫補助による 発掘調査報告書

安倍寺遺跡第18次調査  
纏向遺跡第196次調査

2019. 12. 27

桜井市教育委員会



桜井市

# 平成30年度国庫補助による 発掘調査報告書

2019. 12. 27

桜井市教育委員会



## 序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約7割を占める山地より流れ出る栗原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流は平野部をほぼ東西に横断し、この地に生きる私達に豊かな恵みを与え続けています。

市内には大和川の北側に芝遺跡、纏向遺跡、箸墓古墳、南側には大福遺跡、吉備池廃寺、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳など全国的にも注目される貴重な文化遺産が多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業のひとつとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成30年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち安倍寺遺跡第18次調査と纏向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）調査と、文殊院北遺跡隣接地において不時発見された遺跡の調査成果をおさめております。本書によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事して頂いた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深くお礼を申し上げ、序の言葉とさせていただきます

令和元年12月27日

桜井市教育委員会

教育長 上 田 陽 一



# 例 言

1. 本書は、平成30年度国庫補助事業として桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本報告書は、安倍寺遺跡第18次調査と纏向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）調査の成果と、文殊院北遺跡隣接地で不時発見された遺跡の調査成果を掲載している。
2. 調査主体：桜井市教育委員会  
教育長 上田陽一  
事務局長 奥田道明  
桜井市纏向学術センター所長 寺澤 薫  
文化財課長 橋本輝彦  
副主幹 文化財係長事務取扱 清水将之、副主幹 調査研究係長事務取扱 福辻 淳  
主査 松宮昌樹、主査 丹羽恵二、技師 森 暢郎、技師補 飯塚健太  
臨時職員 三沢朋未、藤村裕美、中屋菜緒、生島雅美
3. 調査担当者：松宮昌樹、丹羽恵二、飯塚健太、三沢朋未、藤村裕美
4. 調査補助員：堂浦千景、松村朋美
5. 調査作業員：田村則佳、森 貞之、高見 淳、北島 弘、北島奈美子、田中俊光、竹島 満、  
 嵩岡孝夫、芝 久善、井前 茂、中川 忠
6. 整理作業及び報告書作成：上記補助員及び嶋岡由美、吉川晴美、小松令子、太田久仁子
7. 現地調査及び遺物整理に関して以下の機関、団体、個人の方々からさまざまなご指導、ご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）  
水野敏典（奈良県立橿原考古学研究所）
8. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。編集は三沢がおこなった。  
なお、第2章第2節で報告している鉄製品のX線写真は、奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義氏に撮影していただいた。記して感謝いたします。
9. 土層・遺物の色調については「新版・標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修、1970）を使用し、全て目測で比定した。
10. 各章で使用している都市地形図は、平成20年測量のものを使用している。
11. 本書における方位・レベルはすべて世界測地系によるものを示し、レベルは海拔高を表す。
12. 本書記載の遺物実測図の断面は、土師質のもの－白抜き、須恵質のもの－黒塗り、瓦－網目、石器・金属器－斜線とした。
13. 図版の遺物番号は、該当する各節の遺物番号に対応している。
14. 出土遺物をはじめとする調査記録一切は、桜井市教育委員会の管理のもと桜井市立埋蔵文化財センターで保管している。活用されたい。

# 目 次

第1章	平成30年度の国庫補助による発掘調査	1
第2章	発掘調査の成果	
第1節	安倍寺遺跡第18次発掘調査報告	3
第2節	纏向遺跡第196次(稲荷山古墳第1次)発掘調査報告	8
附 載	文殊院北遺跡隣接地の調査報告	25

図版

抄録

## 挿 図 目 次

図1	桜井市の位置	1
図2	平成30年度国庫補助による発掘調査地位置図 (S=1/40,000)	2
図3	安倍寺遺跡第18次調査地位置図 (S=1/2,500)	3
図4	調査区平面・断面図 (S=1/150)	4
図5	出土土器 (S=1/3、4のみS=1/4)	5
図6	出土瓦 (S=1/4)	6
図7	安倍木材団地造成前の地形 (S=1/2,500)	6
図8	纏向遺跡第196次調査地位置図 (S=1/5,000)	8
図9	調査地測量図 (S=1/400)	9・10
図10	調査トレンチ配置図 (S=1/400)	11・12
図11	第1トレンチ平面・断面図 (S=1/100)	14
図12	第2トレンチ平面・断面図 (S=1/80)	15
図13	第3トレンチ平面・断面図 (S=80)	17
図14	第4トレンチ平面・断面図 (S=1/80)	18
図15	第5トレンチ平面・断面図 (S=1/100)	19
図16	第6トレンチ平面・断面図 (S=1/80)	19
図17	出土遺物 (S=1/3、10・11はS=1/2)	20
図18	出土鉄斧 (S=1/2)	21
図19	稲荷山古墳墳丘見取図	22
図20	墳丘復元図 (S=1/400)	23
図21	文殊院北遺跡隣接地調査地位置図 (S=1/4,000)	25
図22	調査区平面・断面図 (S=1/20)	26
図23	出土遺物 (S=1/6、3のみS=1/2)	27



# 目 次

表1 平成30年度国庫補助による発掘調査一覧	2
表2 安倍寺遺跡第18次調査 出土遺物観察表	7
表3 纏向遺跡第196次調査 出土遺物観察表	24

# 図 版 目 次

## 安倍寺遺跡第18次調査

### 図版1 安倍寺遺跡第18次調査 (1)

調査前状況 (東より)

完掘状況 (東より)

南壁断面 (北西より)

### 図版2 安倍寺遺跡第18次調査 (2)

出土遺物

### 図版8 纏向遺跡第196次 (6)

第2トレンチ 西壁断面 (南より)

第3トレンチ 遺構検出状況 (西より)

第3トレンチ 全景 (上が北)

### 図版9 纏向遺跡第196次 (7)

第3トレンチ 南壁断面 (東より)

第3トレンチ 南壁断面 (西より)

第4トレンチ 遺構検出状況 (東より)

## 纏向遺跡第196次 (稲荷山古墳第1次) 調査

### 図版3 纏向遺跡第196次 (1)

稲荷山古墳と三輪山 (北西より)

稲荷山古墳と箸墓古墳 (南西より)

### 図版4 纏向遺跡第196次 (2)

稲荷山古墳と調査トレンチ (上が北)

調査前の稲荷山古墳 (東より)

### 図版5 纏向遺跡第196次 (3)

第1トレンチ 遺構検出状況 (東より)

第1トレンチ 遺構完掘状況 (東より)

第1トレンチ 全景 (上が北)

### 図版6 纏向遺跡第196次 (4)

第1トレンチ 南壁断面 (西より)

第1トレンチ SK101断面 (東より)

第1トレンチ SD102断面 (東より)

### 図版7 纏向遺跡第196次 (5)

第2トレンチ 遺構検出状況 (北より)

第2トレンチ 遺構完掘状況 (北より)

第2トレンチ 全景 (上が西)

### 図版10 纏向遺跡第196次 (8)

第4トレンチ 遺構完掘状況 (東より)

第4トレンチ 全景 (上が北)

### 図版11 纏向遺跡第196次 (9)

第4トレンチ 北壁断面 (東より)

第4トレンチ 北壁断面 (西より)

第4トレンチ 東壁断面 (北より)

### 図版12 纏向遺跡第196次 (10)

第5トレンチ 全景 (上が北)

第5トレンチ 南壁断面 (西より)

第5トレンチ SD501断面 (南より)

### 図版13 纏向遺跡第196次 (11)

第5トレンチ SX502断面 (南より)

第6トレンチ 遺構検出状況 (北より)

第6トレンチ 西壁断面 (東より)

### 図版14 纏向遺跡第196次 (12)

出土遺物

## 文殊院北遺跡隣接地の調査

- 図版15 文殊院北遺跡隣接地（1）  
発見時の状況①（南東より）  
発見時の状況②（東より）  
発見時の状況③（東より）
- 図版16 文殊院北遺跡隣接地（2）  
土器発見時の周辺断面（東より）  
調査地断面（南東より）
- 図版17 文殊院北遺跡隣接地（3）  
土器出土状況①（南より）  
土器出土状況②（南東より）
- 図版18 文殊院北遺跡隣接地（4）  
出土遺物

# 第1章 平成30年度の国庫による発掘調査

## 1. 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良盆地の東南部に位置する人口およそ6万人、面積98.91km<sup>2</sup>の都市である。市域の北西部は奈良盆地東南部にあたる平野部が広がっており、北東部から東部・南部にかけては大和高原や龍門山地などの山地で構成されている。平野部は、大和川の本流である初瀬川とその支流である寺川をはじめとした河川の堆積からなり、古くから農耕地として利用されてきた。付近は、奈良盆地と宇陀・吉野地域との結節点にあたっており、市内には複数の古道が通っているなど、古くから交通の要衝であったと考えられ、市域には多くの遺跡が分布している。

桜井市内では、いくつかの遺跡から旧石器時代の遺物が出土しており、縄文時代については栗殿遺跡など遺構を伴う遺跡の存在が知られていることから、古くから生活の痕跡を窺い知ることができる。市内で人の活動が活発になったのは弥生時代以降であり、

絵画土器を出土した芝遺跡や袈裟禪文銅鐸を出土した大福遺跡などが平野部に形成されている。古墳時代前期には纏向遺跡が出現し、出現期古墳である箸墓古墳を含む纏向古墳群が登場する。その他にも、桜井茶白山古墳やメスリ山古墳といった大型前方後円墳が築造されており、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては赤坂天王山古墳や文殊院西古墳といった古墳が多く築造されている。山田寺跡や安倍寺跡、百済大寺と推定されている吉備池廃寺跡など、大王家や古代氏族と密接な関係をもつ古代寺院がいくつも存在している。このように桜井市には、古代国家の形成期に重要な役割を果たしたと考えられる遺跡が多数みられる。



図1 桜井市の位置

## 2. 平成30年度の発掘調査

平成30年度に実施した国庫補助による発掘調査は2件であり、安倍寺遺跡第18次調査は個人住宅建築に伴う調査、纏向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）調査は店舗開発に伴う調査である。本書では、安倍寺遺跡第18次調査と纏向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）調査の成果を報告する。また、文殊院北遺跡隣接地において不時発見があったため、その成果も報告する。

表1 平成30年度国庫補助による発掘調査一覧

地図No	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	安倍寺遺跡第18次	安倍木材団地1-12-9	6月18日～6月27日	60㎡	土師器、須恵器、瓦	松宮藤村
2	纏向遺跡第196次 (稲荷山古墳第1次)	芝1050、1051-1、 1052-1、1053-1、 1054-2	1月23日～3月11日	169.5㎡	古墳墳丘、旧河道 須恵器、土師器、弥生土器	三沢
3	文殊院北遺跡隣接地	阿部645	5月27日・28日	2.55㎡	土器棺蓋、石鏡	丹羽飯塚 三沢

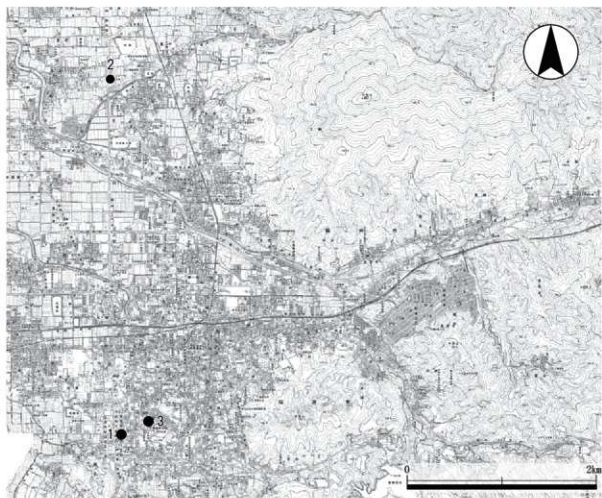


図2 平成30年度国庫補助による発掘調査地位位置図 (S=1/40,000)

## 第2章 発掘調査の成果

### 第1節 安倍寺遺跡第18次発掘調査報告

#### 1. はじめに

安倍寺遺跡第18次調査は、桜井市安倍木材団地1・12・9の個人住宅建設に先立っておこなわれた発掘調査である。安倍寺遺跡は、7世紀中頃に建立されたと考えられる安倍寺跡と周辺を含む範囲、特に寺院の西および北側を中心に広がる集落遺跡で、乙巳の変後の左大臣阿倍倉梯麻呂を輩出した古代豪族阿倍氏の活動拠点としても注目される遺跡である。

これまでの調査成果をみると、安倍寺跡の主要伽藍および寺域の西限はほぼ確定し、南・東限についてもその概観を捉えるまでに至っている。しかし北限ならびに北域には不明瞭部分が多い。調査地から南東へ約180mの場所でおこなわれた安倍寺跡第7次調査<sup>1)</sup>では、北に向かう落ち込みを検出し、銅滓や銅製品が出土している。このことから、安倍寺に関連する工房や雑舎が存在する可能性が指摘されており、またほぼ同じ敷地内でおこなわれた安倍寺跡第12次調査<sup>2)</sup>や第20次調査<sup>3)</sup>でも、木簡や銅・ガラスなど鍛冶関連遺物が出土している。今回の調査地は安倍寺跡から約150m北側に位置しており、そのため安倍寺に関連する遺構の検出が期待された。

調査期間は平成30年6月18日～6月27日で、調査面積は約60m<sup>2</sup>である。

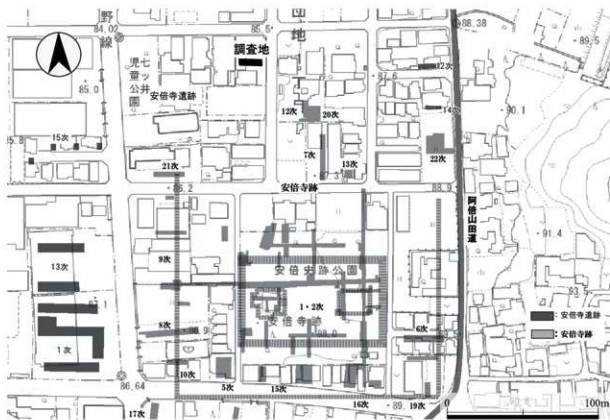


図3 安倍寺遺跡第18次調査地位置図 (S=1/2,500)

## 2. 調査の成果

調査方法と基本層序 (図4、図版1)

対象地に東西15m×南北4mでトレンチを設定した。まず基本層序は、現代盛土 (図4-1層)、現代耕作土 (2層)、耕作土 (3~6層)、河川堆積 (10~15層)の順に堆積していた。

重機により現代盛土 (1層)、現代耕作土 (2層)、耕作土 (3~6層)を除去し下層を確認したところ、暗オリーブ黒色粘質シルト (10層)から瓦や古式土師器が出土したため、この面で精査をおこなったが遺構は検出できなかった。その後、下層の堆積を確認したところ、人頭大の礫を含む黒色の砂礫層 (15層)が堆積していた。10層以下は湧水が激しく、砂礫が混じる粘質シルト層が下層まで続くため、河川堆積だと考えられる。河川堆積は10層と11層を上層、12層から以下を下層とする。

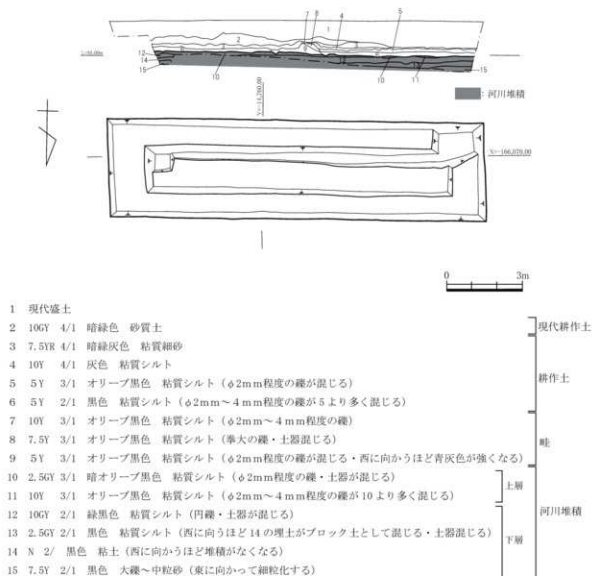


図4 調査区平面・断面図 (S=1/150)

### 3. 出土遺物

今回の調査では、コンテナケースに換算して3箱分の土器が出土した。すべて河川堆積から出土したもので、その中から図示できたものは土器15点、瓦2点であった。

#### (1) 土器 (図5、図版2)

(1～4)は河川堆積上層(図4-10層)から出土した土器である。(1～3)は須恵器の坏身である。(3)には底部にヘラ記号が残っている。(4)は須恵器甕で復元口径32.4cm、残存高11.1cmを測る。外面の頸部に自然釉がわずかに付着している。(5～15)は河川堆積下層(図4-12層・13層)から出土した土器である。(6～8)は甕であり、すべて内面にケズリが施されている。(9・10)は高坏で、(9)は坏部、(10)は脚部である。(11)は小型器台の坏部で、内面にヨコミガキ後タテミガキの調整が施されている。(13)は有段鉢である。復元口径14cm、残存高4cmを測り、口縁部が大きく外反している。(14・15)は小型丸底甕で、いずれも外面にミガキが施されている。

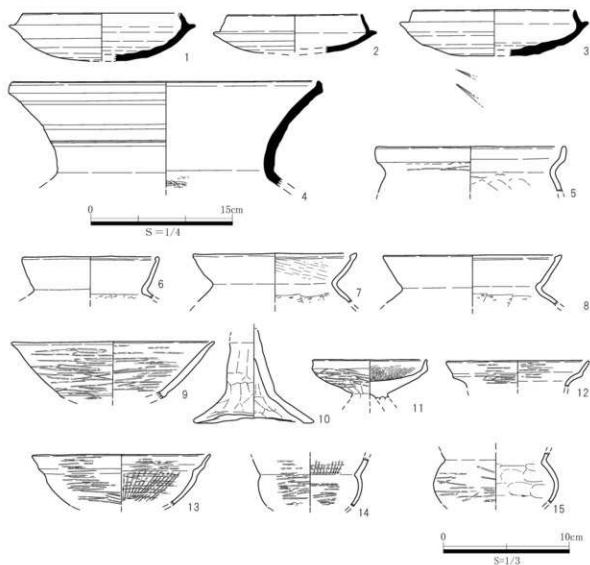


図5 出土土器 (S=1/3、4のみS=1/4)

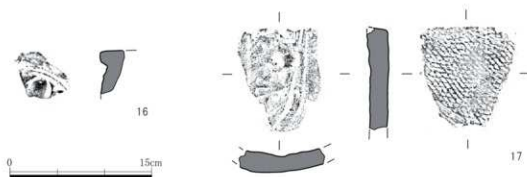


図6 出土瓦 (S=1/4)

今回出土した土器は、小片がほとんどだったが、小型丸底壺や須恵器坏身の形状から(1~4)は6世紀におさまる土器だと考えられ、(5~15)は布留2式頃<sup>4)</sup>の土器と考えられる。

#### (2) 瓦(図6、図版2)

(16・17)は河川堆積上層で出土した瓦で、(16)は単弁蓮華文軒丸瓦片で、蓮弁の一部のみ残存しており、他の部分は剥離している。(17)は平瓦で、凸面は斜格子状のタタキ目が、凹面は布目をナデ消している痕跡がある。

今回出土した瓦の総重量は約6.8kgである。100㎡あたりの出土重量は約11.3kgとなる。飛鳥藤原周辺の寺院跡の100㎡あたりの出土量と比較すると、建物ごと移築している吉備池庵寺<sup>5)</sup>と比べても今回の調査からの瓦の出土量は少ない<sup>6)</sup>。これは本調査地が安倍寺跡の中心部から約150m離れた場所に位置しているため、少量であると考えられる。

#### 4. まとめ

今回の調査地では河川堆積上面で遺構検出をおこなった。しかし顕著な遺構は検出できず、湧水が激しい河川堆積が下層まで続いており、過去に周辺で行った安倍寺跡第7次調査や第20次調査で出土した鍛冶関連遺物なども確認することはできなかった。

調査地は元々河川上に位置しており、人々が生活するのに適さない場所で、それは安倍寺が建立された頃も変化がなかったと推測される。しかし河川が埋まる過程に堆積した層からは瓦が出土しているため、今回確認できた河川跡の南側までは寺院に関連する堆積が広がっていたのではないかと考えられる。

(藤村)



図7 昭和37年頃の安倍木材団地造成前の地形 (S=1/2,500)



【註記】

- 1) 清水真一1988「安倍寺遺跡三本柿地区発掘調査概報」桜井市教育委員会
- 2) 清水真一1991「安倍寺跡第12次調査」『桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会
- 3) 木場佳子2008「安倍寺跡第20次調査」『平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』第30集 桜井市教育委員会
- 4) 寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 5) 吉備池庵寺跡からは、瓦が平均68.2kg出土している。
- 6) 小澤 毅（編）2003「吉備池庵寺発掘調査報告書」奈良文化財研究所創立50周年記念学報 第68冊 奈良文化財研究所

【参考文献】

- 丸山香代・丹羽恵二2002「阿部氏～桜井の古代氏族～」(財) 桜井市文化財協会  
 清水 智2004「安倍寺遺跡第12次調査」『桜井市内埋蔵文化財2002年度発掘調査報告書6』（財）桜井市文化財協会  
 丹羽恵二2005「安倍寺遺跡第14次調査」『平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』第26集 桜井市教育委員会

表2 安倍寺遺跡第18次調査 出土遺物観察表

図録番号	種類	図録	地区・遺構	層位	技法 集	法長 (cm)		現存	色 調	備 考
						口徑	底径			
図5-1 図録2-1	煎茶器	坏身	河内海積 上層	黒色粘質 質シルト	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	(126)	(3.8)	全体1/6、 受附部1/6強	外面：N6・灰色とN5・灰色との中間 内面：N6・灰色	
図5-2 図録2-2	煎茶器	坏身	河内海積 上層	黒色粘質 質シルト	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	(106)	(3)	全体1/5、 受附1/7	外面：N7・灰白 内面：N7・灰白	
図5-3 図録2-3	煎茶器	坏身	河内海積 上層	黒色粘質 質シルト	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	(128)	(3.6)	全体1/6弱、 口徑1/5	外面：N6・灰色 内面：N6・灰色	
図5-4 図録2-4	煎茶器	蓋	河内海積 上層	黒色粘質 質シルト	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、タテギ後ナゲ、タ テギ	(32.6)	(11.1)	口徑1/6	外面：N6・灰色 内面：N6・灰色	外面に自然磨材着
図5-5 図録2-5	土師器	皿	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ヨコナデ、ミギキ、ナデ 内面：ヨコナデ、指痕	(148)	(3.6)	口徑1/8	外面：3YR5/2にL10・黄褐色、 3YR5/4にL10・黄褐色 内面：5YR4/2にL10・黄褐色	
図5-6 図録2-6	土師器	蓋	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ナデ 内面：ナデ、ケズリ	(106)	(3.1)	口徑1/20弱	外面：2.5YR6/2にL10・黄褐色、 10YR6/3にL10・黄褐色、 10YR4/1黄褐色	
図5-7 図録2-7	土師器	蓋	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ヨコナデ、ママツ有リ 内面：ハラ、ナデ、ケズリ	(128)	(3.8)	口徑一弱部、 口徑1/8	外面：2.5YR6/2にL10・黄褐色、 内面：10YR6/2にL10・黄褐色	外面にスス付着
図5-8 図録2-8	土師器	皿	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ナデ 内面：ナデ、ケズリ	(21)	(3.8)	口徑一弱部、 口徑1/8	外面：10YR6/1にL10・黄褐色、10YR6/3 にL10・黄褐色 内面：10YR6/1にL10・黄褐色、10YR6/3 にL10・黄褐色	外面に沿って 中心から縁へ
図5-9 図録2-9	土師器	高杯	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ミギキ 内面：ヨコナデ後ミギキ	(16)	(8.5)	口徑1/6弱	外面：2.5YR6/4にL10・黄褐色 内面：2.5YR6/4にL10・黄褐色	
図5-10 図録2-10	土師器	高杯	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：面取り、指ナデ 内面：ナデ、底リ、指ナデキ		9.4 (7.3)	胴部80%	外面：10YR6/2にL10・黄褐色 内面：2.5Y6/2にL10・黄褐色	
図5-11 図録2-11	土師器	小型器台	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ヨコナデ、ミギキ、ケズリ 内面：ヨコナデ、ヨコミギキ後タテ ミギキ	(9)	(3)	胴部80%、 口徑1/4	外面：2.5Y7/2にL10・黄褐色 内面：2.5Y6/2にL10・黄褐色	
図5-12 図録2-12	土師器	有段鉢	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ミギキ 内面：ミギキ	(11.2)	(2.1)	口徑1/6弱	外面：2.5YR6/2にL10・黄褐色 内面：2.5YR5/2にL10・黄褐色（やや 濃）	
図5-13 図録2-13	土師器	有段鉢	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ミギキ 内面：ミギキ	(14)	(4)	全体15%、 口徑1/3	外面：2.5YR6/2にL10・黄褐色 内面：2.5YR5/2にL10・黄褐色	
図5-14 図録2-14	土師器	小型丸底器	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ミギキ、ケズリ後ミギキ 内面：タテミギキ後コシギキ、ミギ キ	(9)	(3.7)	胴部1/7	外面：2.5YR6/4にL10・黄褐色 内面：2.5YR6/2にL10・黄褐色	
図5-15 図録2-15	土師器	小型丸底器	河内海積 下層	黒色粘質 シルト	外面：ナデ、ミギキ 内面：ナデ、指ナデ	(8)	(4)	口徑下一弱部、 胴部1/4	外面：2.5YR6/4にL10・黄褐色 内面：2.5YR6/4にL10・黄褐色	
図5-16 図録2-16	瓦	軒丸瓦	河内海積 上層	黒色粘質 質シルト	外面：草倉遺草文 内面：調整しているため調整不明	最大長 (4.6)	最大幅 (5.5)	厚さ (2.5)	外面：2.5Y6/4にL10・黄褐色 内面：2.5Y6/4にL10・黄褐色	
図5-17 図録2-17	瓦	平瓦	河内海積 上層	黒色粘質 質シルト	外面：磨子目タテキ 内面：毎日ナデ磨いている	最大長 (10.2)	最大幅 (8.5)	厚さ (2.2)	外面：N6・灰色とN5・灰色との中間 内面：N6・灰色とN5・灰色との中間	

## 第2節 纏向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）発掘調査報告

### 1. はじめに

纏向遺跡第196次調査は、稲荷山古墳の隣接地で起こった発掘調査である。この敷地で店舗開発が計画されたため、古墳の周辺で範囲確認のための発掘調査と、対象地の南に調整池が計画されたため、遺構への影響の有無を確認するための試掘調査をおこなった。

周辺には、100m北東に箸墓古墳が存在している。その他に、調査地の50m北では纏向遺跡第119次・第121次調査がおこなわれており、古墳時代前期後半頃の埋没古墳である箸中イヅカ古墳が発見されている<sup>1)</sup>。また、200m北でも纏向遺跡第112次調査がおこなわれており、古墳時代前期後半頃の埋没古墳である箸中ビハクビ古墳が確認されている。

稲荷山古墳は現況で直径約20m、高さ約3mの円丘状の高まりが残っている古墳である。この古墳について、明治20年代に当時奈良県属であった野淵龍藩によって製作された『古墳墓見取図』<sup>2)</sup>に絵図が残されており（図19）、それによると社が描かれた墳丘の南側に細長い高まりが存在していたようである。

調査期間は平成31年1月23日から3月11日で、調査面積は169.5㎡である。

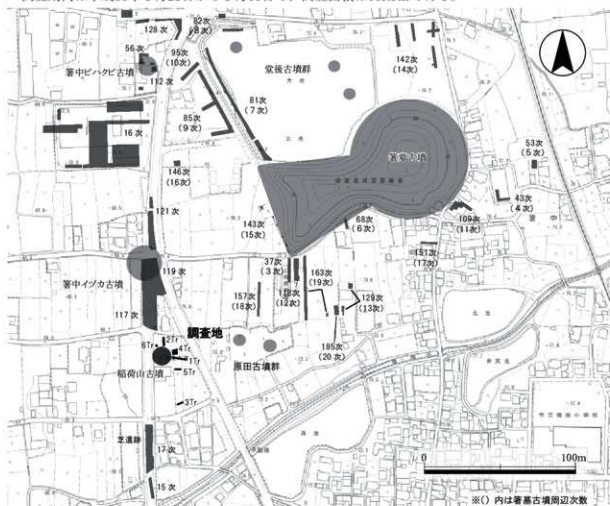


図8 纏向遺跡第196次調査地位置図 (S=1/5,000)

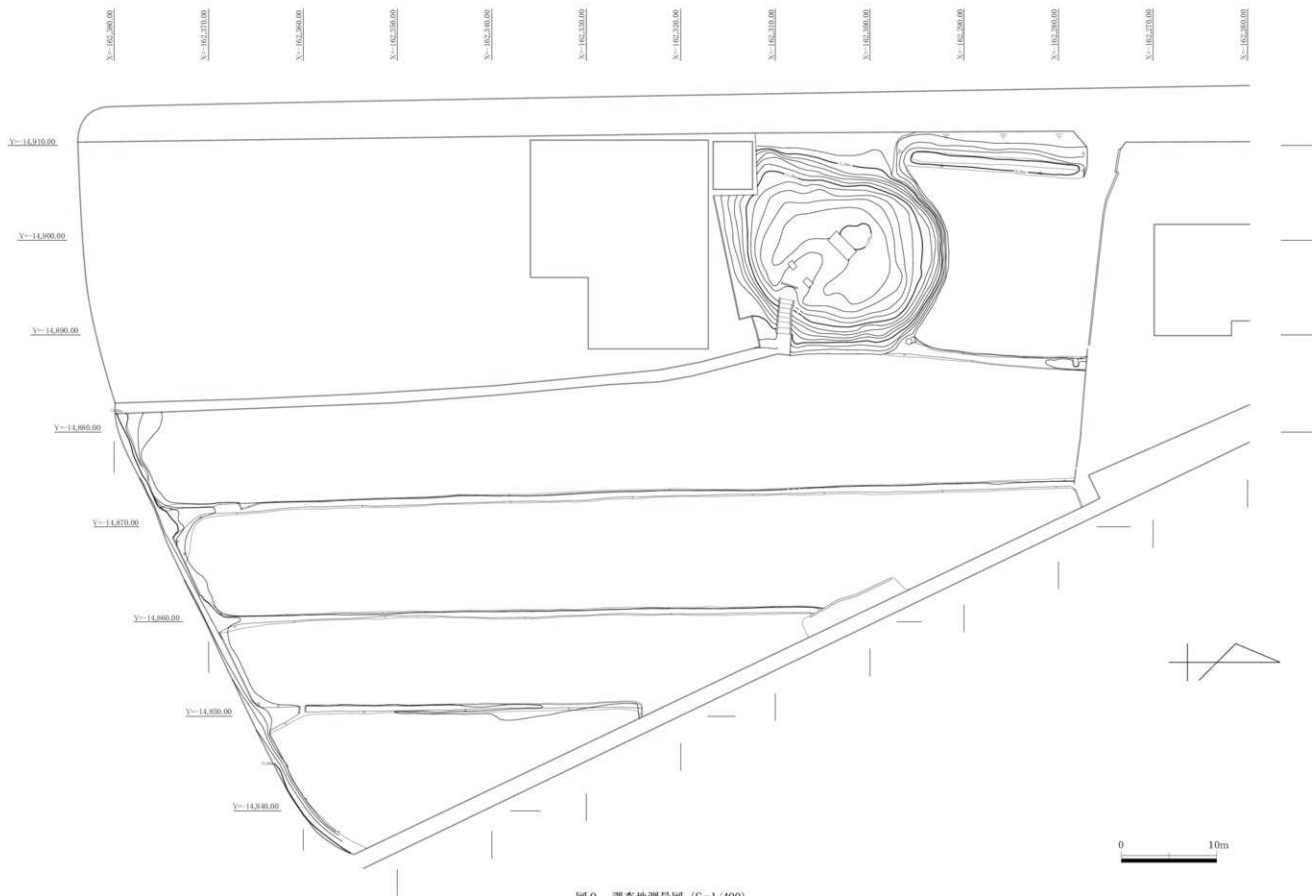


图9 调查地测量图 (S=1/400)

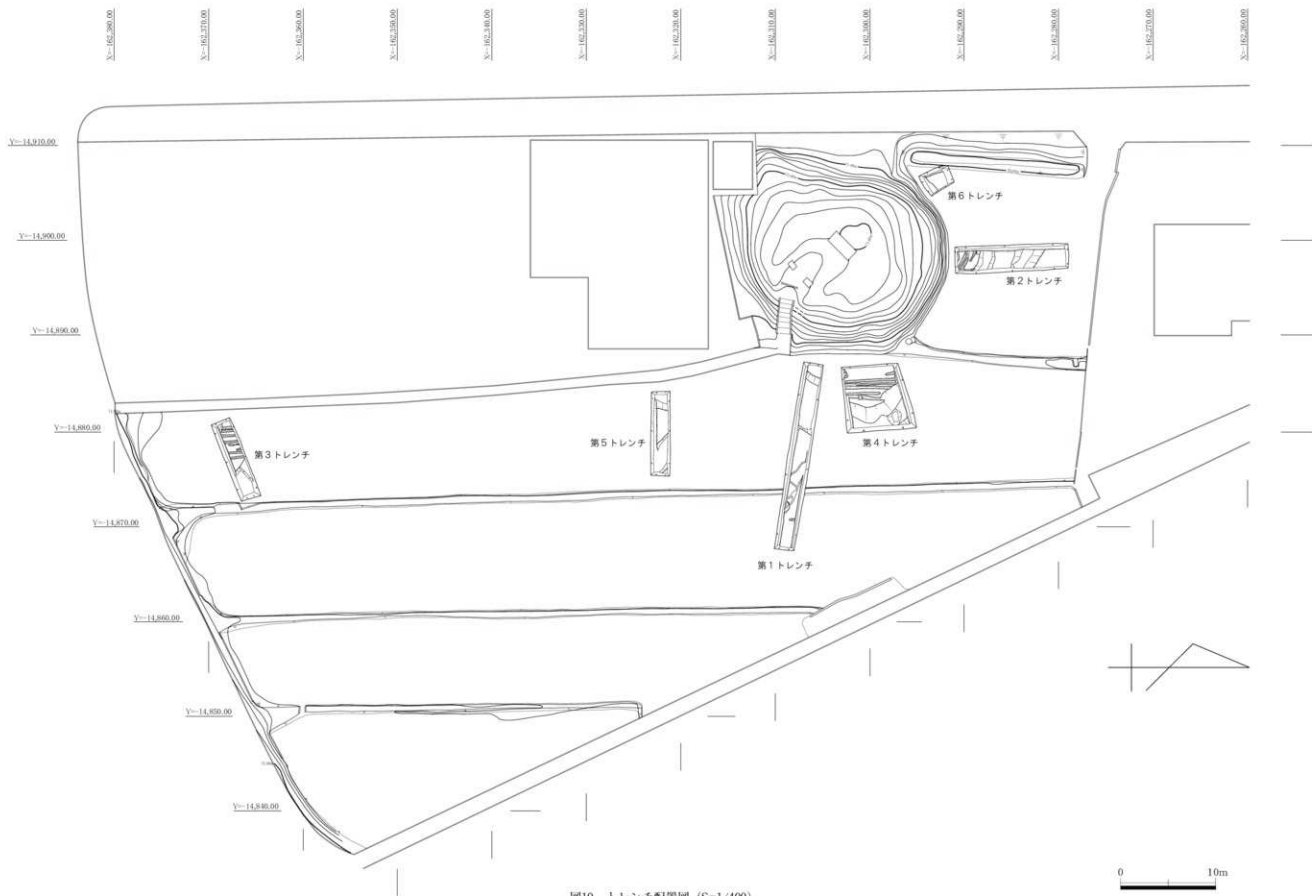


図10 トレンチ配置図 (S=1/400)

## 2. 調査の成果

### (1) 調査の方法

古墳の周辺では、現在残っている墳丘の裾から北東へ伸びる東西20m、南北2mの第1トレンチ(図11、図版5・6)を、墳丘の北側に東西2.5m、南北12mの第2トレンチ(図12、図版7・8)を、第1トレンチと第2トレンチの間に東西8m、南北7mの第4トレンチ(図14、図版9～11)を、第2トレンチの西側に東西2.5m、南北3mの第6トレンチ(図16、図版13)を設定し調査をおこなった。また、前方部の確認のために墳丘の南東側に東西2m、南北9mの第5トレンチ(図15、図版12・13)を設定して調査をおこなった。さらに、調整池予定地の調査地内の南側に東西9m、南北2mの第3トレンチ(図13、図版8・9)を設定し試掘調査をおこなった。まず、現代耕作土、旧耕作土をバックホーで掘削し、それ以降を人力に切り替え調査をおこなった。

### (2) 第1トレンチ(図11、図版5・6)

基本層序は、上から現代耕作土(1～3層)、旧耕作土(4～8層)、地山層(44～51層)となる。墳丘側では、地表下約60cmで墳丘盛土(39～43層)を検出している。トレンチの中央より西側では、地表下約80～90cmで周濠の最上層埋土を旧耕作土直下で検出している。

検出した墳丘は北東-南西方向に伸びている。墳丘盛土は褐色土層や明黄褐色土層などが続いており、旧耕作土直下から地山までの約30cmを確認した。

周濠については、上面で検出できた幅は約6m、周濠底幅約4mであり、周濠の深さは約50cmとかなり浅い。主な出土遺物は、土器の小片と古墳の崩落土と考えられる堆積から鉄斧が出土した。

トレンチの東側では、SP101とSD102を検出した。SP101は東西約1.1m、南北50cm以上、深さ約24cmで、断割りによって破壊してしまったため正確な形態は不明である。SD102は幅約1.5m、深さ約16cmの溝である。いずれも出土遺物が少なく、時期については断定することはできないが、SD102からは須恵器が出土していることから古墳時代後期の遺構であると考えられる。このことから、SD102の埋土上面から掘削されているSP101の時期は古墳時代後期以降であると考えられる。

### (3) 第2トレンチ(図12、図版7・8)

基本層序は、上から現代耕作土(1～3層)、旧耕作土(4～24層)、地山層(41～43層)となる。墳丘側では、地表下約50～80cmで墳丘盛土(39～43層)を検出している。トレンチの中央付近では、地表下約80cm～1mで周濠の最上層埋土を旧耕作土直下で検出している。

検出した墳丘は北西-南東方向に伸びている。墳丘盛土にはぶい黄褐色土層や黄褐色土層などが続いており、旧耕作土直下から地山までの約40cmを確認した。

周濠については、上面で検出した幅は約4.2m、周濠底幅約1.4m、深さ40cmと浅く、緩やかに傾斜している。墳丘盛土からは庄内3式期ごろの高坏が出土している。

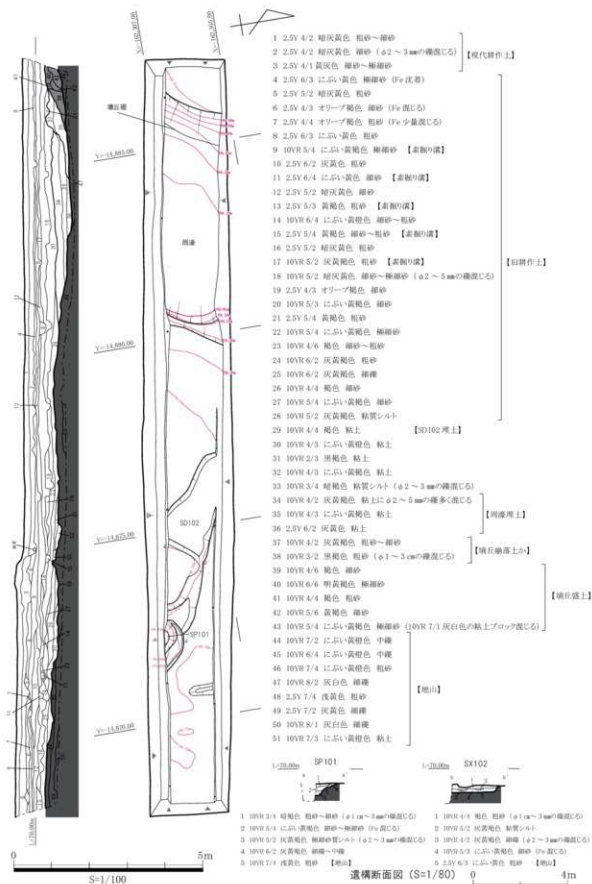


図11 第1トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

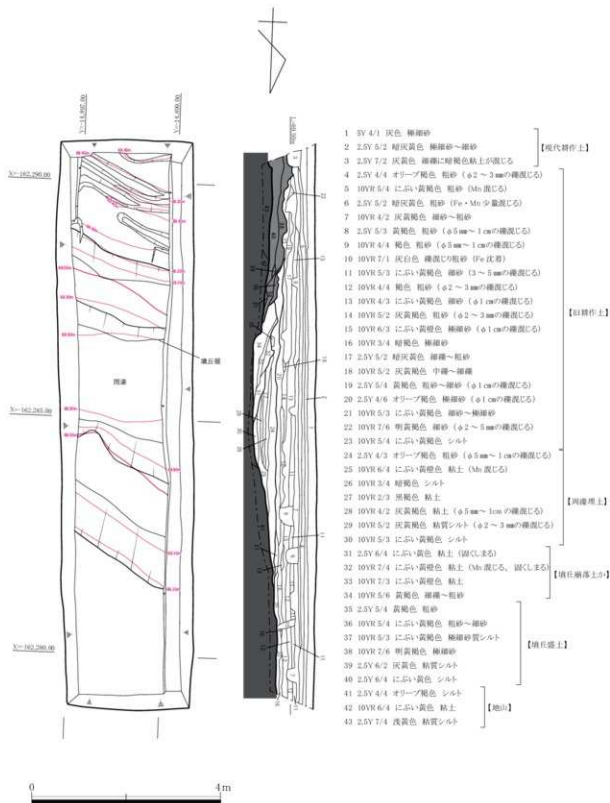


図12 第2トレンチ平面・断面図 (S=1/80)

(4) 第3トレンチ (図13、図版8・9)

第3トレンチ付近では調整池が計画されている。そのため、遺構への影響の有無を確認するためにおこなった試掘調査のトレンチである。基本層序は、上から現代耕作土(1~7層)、旧耕作土(8~10層)、弥生時代の包含層(17層)となる。旧耕作土直下には厚く弥生時代の包含層が堆積しており、調整池の掘削によって遺構面が壊されないことがわかったので、包含層上面で調査は終了している。

検出した遺構は、ピット1基と旧河道である。旧河道は北西-南東に流れる河道で、幅約3.5mを検出しておりトレンチ外に続いている。中礫~細礫がラミナ状に厚く堆積しており、上層では鉄分の沈着により硬化していた。主な出土遺物は、弥生時代の甕などが出土している。その他に、包含層からは石廬丁やササカイト片などが出土した。

(5) 第4トレンチ (図14、図版9~11)

第1トレンチと第2トレンチで検出した墳丘の形態を明らかにするために、この2つのトレンチの間に第4トレンチを設定して調査をおこなった。基本層序は、上から現代耕作土(1~3層)、旧耕作土(4~12層)、地山層(37~43層)となる。墳丘側では、地表下約40~90cmで墳丘盛土(39~43層)を検出している。トレンチの東側では、地表下約80cmで周濠の最上層埋土を旧耕作土直下で検出している。

このトレンチでは墳丘のコーナー部分を検出した。墳丘盛土は、にぶい黄褐色土層や黄褐色土層などが続いており、旧耕作土直下から地山までの約40cmを確認した。周濠については、外肩部分を検出していないため上面検出での規模は不明であるが、周濠底幅が約1.4mであることを確認することができた。緩やかに傾斜している。出土遺物は少なく、土器の小片のみであった。

(6) 第5トレンチ (図15、図版12・13)

前方部の有無を確認するために設定したトレンチである。基本層序は、上から現代耕作土(1~3層)、旧耕作土(4~16層)、地山層(22・23層)となる。

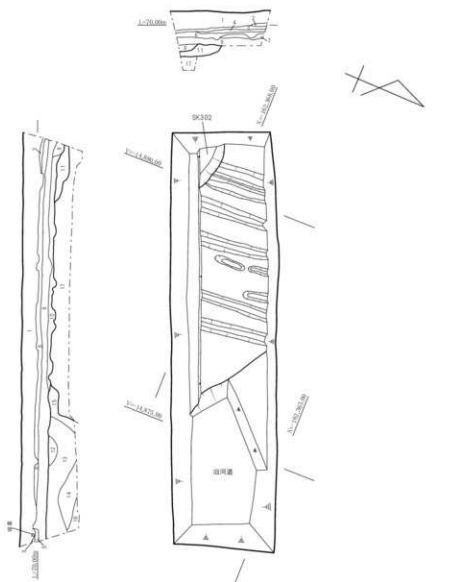
検出した遺構は、地山上面で溝(SD501)や落ち込み(SX502)を検出した。SD501は北西-南東方向に伸びる幅約2.8m、深さ約20cmの溝で、SX502は幅約1.6mを検出しておりトレンチ外へと続いている落ち込みである。SD501やSX502の方向や土層の堆積状況などから古墳とは別の遺構であると判断した。これらの遺構からは出土遺物は少なく小片であるため、遺構の時期を断定することは困難である。

(7) 第6トレンチ (図16、図版13)

古墳の西側の状況を確認するために設定したトレンチである。基本層序は、上から現代耕作土(1層)、旧耕作土(2層)となる。墳丘側では、地表下約60cmで墳丘盛土(8・9層)を検出している。

このトレンチでも古墳の墳丘と周濠を検出したが、調査の都合で上面検出に留めて終了している。墳丘は北東-南西方向に伸びているのを確認した。このトレンチで上面検出した墳丘盛土幅(トレン

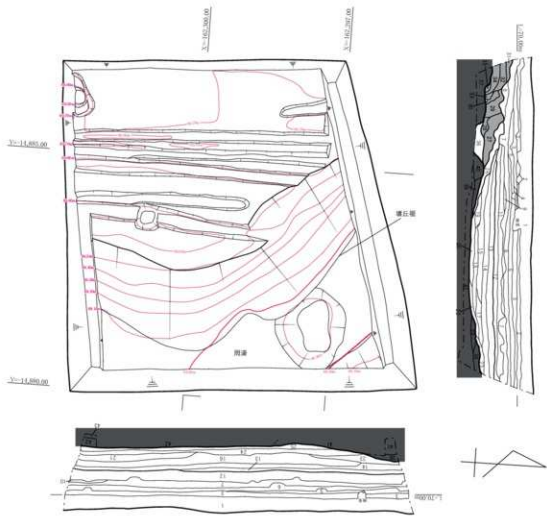




- 1 2.5V 3/1 黒褐色 細砂
- 2 2.5V 5/2 暗灰黄色 極細砂 (φ2~3mmの礫、Fe 混じる)
- 3 2.5V 4/2 暗灰黄色 細砂 (Fe 混じる)
- 4 2.5V 6/3 に灰~黄色 極細砂 (Fe 混じる)
- 5 2.5V 4/6 明黄褐色 細砂~粗砂
- 6 2.5V 5/2 暗灰黄色 粗砂 (Fe 混じる)
- 7 10YR 8/2 灰黄褐色 粗砂 (Fe 混じる)
- 8 10YR 4/3 に灰~黄褐色 粗砂 (φ2~5mmの礫混じる)
- 9 2.5V 6/3 に灰~黄色 粗砂~細砂 【泥混り状】
- 10 2.5V 5/2 暗灰黄色 粗砂 (φ2~5mmの礫混じる)
- 11 2.5V 5/4 黄褐色 中礫
- 12 10YR 2/3 黒褐色 φ2~5cmの礫が Fe や Mn によって混まっている
- 13 2.5V 6/1 黄灰色 細礫
- 14 10YR 3/2 黒褐色 細礫が Fe や Mn の影響で固まる
- 15 2.5V 7/1 灰白色 細礫~中礫
- 16 2.5V 6/1 黄灰色 細礫~中礫
- 17 10YR 3/3 暗褐色 細砂~粗砂 (φ2~3mmの礫混じる) 【包含層】

0 4m

図13 第3トレンチ平面・断面図 (S=1/80)



- |   |   |   |         |
|---|---|---|---------|
| 1 2.5Y 3/2 黒褐色 細砂～粗砂                          | 【現代耕作土】                                     | 26 10YR 3/3 暗褐色 細砂 ( $\phi$ 1cmの礫、 $M_0$ 混じる) | 【墳丘崩落土】 |
| 2 2.5Y 6/3 にぶい黄色 極細砂 ( $M_0$ 少量混じる)           |   | 27 10YR 5/6 黄褐色 粗砂 ( $M_0$ 少量混じる)             |         |
| 3 2.5Y 7/2 灰黄色 極細砂 ( $\beta$ 比着)              |   | 28 2.5Y 6/4 にぶい黄色 細砂～粗砂 ( $M_0$ 少量混じる)        |         |
| 4 10YR 6/4 にぶい黄褐色 粗砂                          | 29 2.5Y 4/6 オリーブ褐色 細砂 ( $M_0$ 混じる)          | 【墳丘盛土】  |         |
| 5 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 細砂～粗砂                       | 30 2.5Y 5/6 黄褐色 極細砂 ( $M_0$ 少量混じる)          |   |         |
| 6 2.5Y 5/3 黄褐色 極細砂                            | 31 2.5Y 5/3 黄褐色 粗砂 ( $M_0$ 少量混じる)           |   |         |
| 7 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 粗砂 ( $\phi$ 5mm～1cmの礫混じる)   | 32 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト ( $M_0$ 混じる)          |   |         |
| 8 2.5Y 4/2 暗灰黄色 粗砂 ( $\beta$ 比着、 $M_0$ 少量混じる) | 33 2.5Y 6/2 灰黄色 中礫                          |   |         |
| 9 2.5Y 5/4 黄褐色 粗砂                             | 34 2.5Y 6/6 明黄褐色 極細砂 ( $M_0$ 少量混じる)         | 【下層遺構】  |         |
| 10 10YR 5/3 にぶい黄褐色 粗砂                         | 35 2.5Y 4/6 オリーブ褐色 粘質シルト ( $\phi$ 1cmの礫混じる) |   |         |
| 11 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 粗砂                         | 36 10YR 6/3 にぶい黄褐色 粗砂～極細                    |   |         |
| 12 2.5Y 4/6 オリーブ褐色 細砂                         | 37 2.5Y 6/2 灰黄色 中礫                          | 【地山】  |         |
| 13 10YR 5/3 にぶい黄褐色 粘質シルト ( $\phi$ 2～3mmの礫混じる) | 38 10YR 4/4 褐色 粗砂～細砂 ( $\phi$ 1cmの礫混じる)     |   |         |
| 14 10YR 5/2 灰黄褐色 粘土 (5mm～1cmの礫混じる)            | 39 10YR 5/3 にぶい黄褐色 粘土                       |   |         |
| 15 10YR 4/2 灰黄褐色 粘質シルト (5mm～1cmの礫混じる)         | 40 10YR 5/6 黄褐色 粘土                          |   |         |
| 16 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト ( $\phi$ 5mm～1cmの礫混じる) | 41 2.5Y 6/2 灰黄色 礫混～中礫                       |   |         |
| 17 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト                      | 42 2.5Y 6/6 明黄褐色 細礫                         |   |         |
| 18 10YR 4/1 暗灰色 粘土 (5mm～1cmの礫混じる)             | 43 2.5Y 7/6 灰黄色 礫混～中礫                       |   |         |
| 19 10YR 4/2 灰黄褐色 粗砂 ( $\phi$ 2mm～1cmの礫混じる)    |   |   |         |
| 20 10YR 4/2 灰黄褐色 粘土                           |   |   |         |
| 21 10YR 4/2 灰黄褐色 粘質シルト                        |   |   |         |
| 22 10YR 4/1 暗灰色 極細砂 ( $\phi$ 1cmの礫混じる)        |   |   |         |
| 23 10YR 3/3 暗褐色 粘質シルト ( $\phi$ 5mm～1cmの礫混じる)  |   |   |         |
| 24 10YR 5/2 灰黄褐色 粘土                           |   |   |         |
| 25 10YR 3/3 暗褐色 粘土                            |   |   |         |

図14 第4トレンチ平面・断面図 (S=1/80)

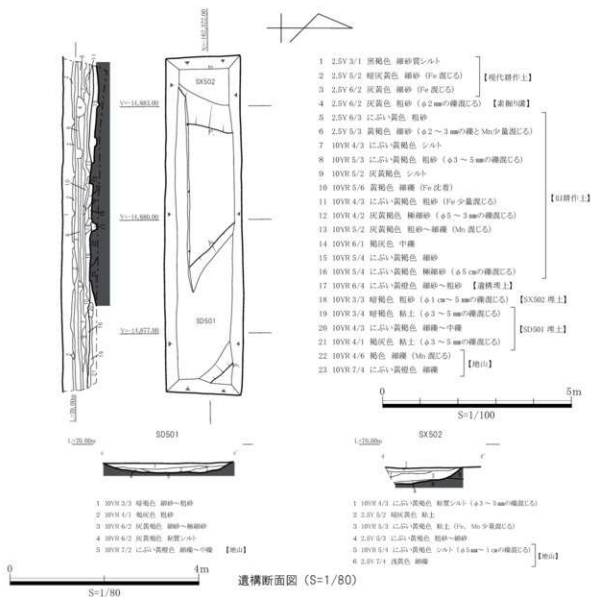


図15 第5トレンチ平面・断面図 (S=1/100)

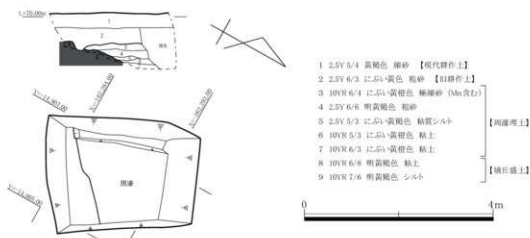


図16 第6トレンチ平面・断面図 (S=1/80)

子南東端から周濠の最上層埋土検出ラインまで)は、第1・2・4トレンチに比べ狭い。

### 3. 出土遺物 (図17、図版14)

今回出土した遺物は、コンテナケースに換算して4箱分であった。細かな法量などについては表3に記載している。

(1～7)は稲荷山古墳に関わる遺構から出土した遺物である。周濠の上層からは須恵器の坏身

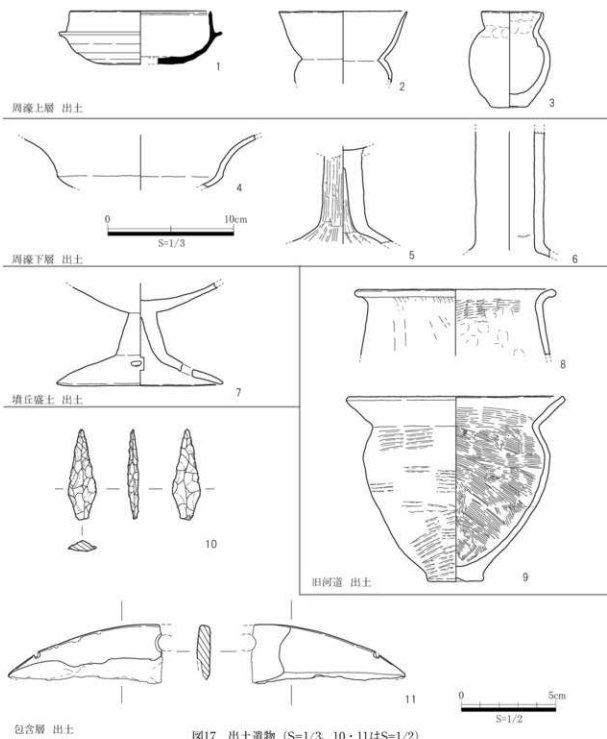


図17 出土遺物 (S=1/3、10・11はS=1/2)

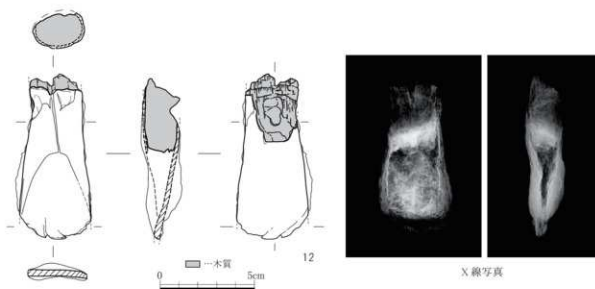


図18 出土鉄斧 (S=1/2)

(1) や小型丸底鉢 (2) などが出土しており、(1) は古墳時代中期末～後期初頭頃、(2) は布留1式期頃の土器であると考えられる。(4～6) は崩落土と考えられる埋土や、周濠埋土の下層から出土した高坏である。(4・5) は庄内0～1式期頃、(6) は弥生時代の土器であると考えられる。

(7) は墳丘盛土内から出土した庄内3式期頃の高坏である<sup>3)</sup>。

(8・9) は第3トレンチで検出した旧河道から出土した土器である。(8) は大和弥生第Ⅱ様式頃、(9) は大和弥生第Ⅶ様式頃の甕である。この旧河道からは比較的遺物の出土数が多いが、いずれも弥生土器であった<sup>4)</sup>。

(10・11) は、第3トレンチの包含層(図13～17層)から出土した石鏃と石庖丁である。この包含層からは石器の他に弥生土器片が出土しており、弥生時代の包含層であると考えられる。

(12) は第1トレンチの崩落土と考えられる堆積(図11～38層)から出土した袋状鉄斧である。縦9.7cm、幅4cm、刃部の厚さ2mm、重さ75.7gで、袋部は両側から折り曲げ鍛接したものと考えられるが、錆が酷く肉眼での接合部の観察は難しい。X線写真によって観察した限り、袋部の接合部など丁寧な作りをした袋状鉄斧であると考えられる。袋部内面には木材が長さ3.7cmほど残存している。

#### 4. 稲荷山古墳について

今回検出した墳丘の状況から、稲荷山古墳の北側は一辺約26mの方形の主丘部を持つ古墳であることがわかった。今回おこなった測量調査の成果も踏まえて現況で復元できる古墳の規模は、北西-南東約26m、南西-北東29m以上で、北西-南東幅に比べ南西-北東に長いことがわかった。さらに、「古墳墓見取図」<sup>2)</sup>に記載されている南側に細長い高まりが取りつくように描かれた絵図(図19)などを含めて考えると、南西側に前方部を持つ前方後墳の可能性が高い。

周濠については、幅がわかるのは第1トレンチと第2トレンチのみであるが、それぞれ検出した幅は約6mと狭い。検出した周濠の特徴として、緩やかに傾斜しており、墳丘側については地山を約15

cm～25cmと浅く掘り込んでいることを確認している。

墳丘については、狭い範囲ではあるが断割り調査をおこなっており、周濠の外側で確認している地山の高さ、墳丘盛土の下層で確認した地山の高さがほぼ水平であることがわかった。墳丘を確認した4つのトレンチからは包含層は確認できず、墳丘に関しては地山直上から盛土をおこなっている。このことから、墳丘のほぼすべてが盛土によって構築されていると考えられる。また、葺石に使用されるような石材が出土しなかったことから、葺石は葺かれていなかったと考えられる。

埋葬施設については、墳丘上に稲荷社が祀られていることから調査をおこなうことができず、どのような埋葬施設が存在していたのか不明である。しかし、検出した墳丘裾から現況の墳頂までの高さが約4mであることから、埋葬施設はすでに削平を受けている可能性も考えられる。また、崩落土から出土した袋状鉄斧

(図18-12、図版14-12)はとても丁寧な作りをしたもので、副葬品であった可能性も考えられる。

時期については、周濠埋土から出土する遺物の量が少なく、稲荷山古墳に伴うと考えられる埴輪も出土していないため断定は難しい。周濠の最上層である旧耕作土との境目付近から古墳時代中期末～後期初頭頃の須恵器(図17-1、図版14-1)が出土しているが、下層では須恵器は出土しておらず、下層から出土した土器のほとんどが弥生土器の小片であった。そのため、第2トレンチの墳丘盛土から出土した高坏(図17-7、図版14-7)の時期から古墳の築造時期の上限は古墳時代初頭の庄内3式期頃であると考えられるが、下限については断定できない。ただし、先述した葺石が葺かれていないことや周濠の形態、埴輪が出土していないことを含めて考えると、前期古墳である可能性が高いのではないかと考えられる。

## 5. まとめ

今回の調査では、稲荷山古墳の墳丘を確認することができた。その結果、稲荷山古墳が従来考えられていた円墳ではなく、方形の主丘部を持つ古墳であることは間違いなく、なおかつ前方後方墳である可能性が高いということが明らかとなった。縦向遺跡内で確認されている古墳の中で、前方後方墳という墳形は数が少ない。前方後方墳の可能性のある古墳は、稲荷山古墳の他に古墳時代前期に築造



図19 稲荷山古墳墳丘見取図 ※註2)文献より

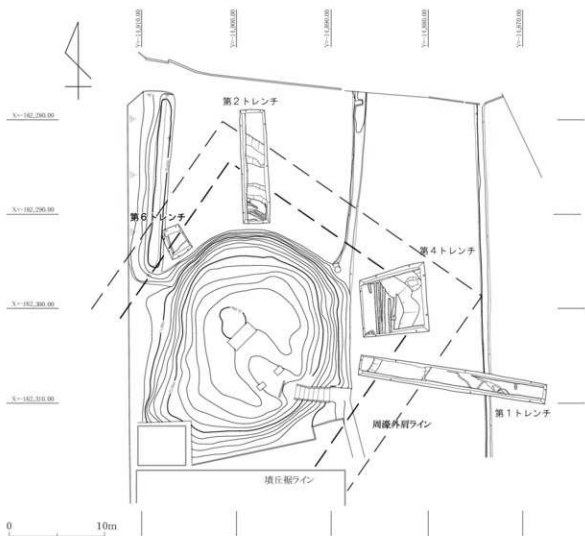


図20 墳丘復元図 (S=1/400)

されたと考えられるメクリ1号墳<sup>3)</sup>や二反田古墳<sup>4)</sup>の2例と数は少ないが、近年まで調査がおこなわれていなかった古墳や埋没古墳であるなど、発掘調査がおこなわれてはじめて明らかとなった古墳ばかりである。そのため、今後の発掘調査が進むことによって纏向古墳群内で前方後方墳が新たに見つかる可能性は高い。さらに、稲荷山古墳の築造時期については、埴輪が出土していないということや周濠の形態などから古墳時代前期の古墳である可能性も考えられる。もし稲荷山古墳が、埴輪が出現する以前の前方後方墳であるのであれば、今までこの時期の前方後方墳の築造は天理市に所在する大和古墳群堂生支群のみに限定されると言われてきたが<sup>7)</sup>、その分布が纏向古墳群にまで確実に広がっているということになる。

また、調査地の南には弥生時代の集落遺跡である芝遺跡が広がっている。今回の調査地から南西に約200mの場所でおこなわれた芝遺跡第17次調査では、遺物を多く含んだ弥生時代の包含層が厚く堆積しており、弥生時代の遺構・遺物が多く見つかった<sup>8)</sup>。北側に広がる纏向遺跡でも、調査地から北へ約40mの場所でおこなわれた第117次調査において、古墳時代初頭の遺構・遺物が多く見つかった<sup>9)</sup>。この2つの遺跡の時期は異なっているが、多くの遺構・遺物が見つかったということは

同じである。周辺がこのような状況であるにも関わらず、稲荷山古墳周辺では第3トレンチ以外で包含層は確認できず、遺構密度も希薄で遺物の出土量も少ない。このような状況は、稲荷山古墳に限らず多くの古墳の周辺でも見られるものであり、古墳の築造場所を選ぶ背景には、このように人の居住地などで利用されていない空間地を選んで築造した可能性が考えられる。

今回の調査では古墳の築造時期を明らかにすることはできなかったが、従来考えられていた円墳とは異なる墳形であることがわかり、なおかつ古墳周辺の土地利用について考察できる資料を得ることができた。墳形や時期については、今後の周辺の調査の進展によって明らかになることを期待したい。

(三沢)

【注記】

- 1) 米川仁一2001「瀬向遺跡第119次・121次調査報告」『奈良県遺跡調査概報 2000年度』奈良県立歴史考古学研究所
  - 2) 秋山日出雄（編）1985「大和古墳群墓取調査書」財団法人由良大和古代文化研究協会
  - 3) 本節における古式土師器の編年観は、主に以下の文献を参考としている。  
寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立歴史考古学研究所
  - 4) 本節における弥生土器の編年観は、主に以下の文献を参考としている。  
大和弥生文化の会2003『奈良県の弥生土器集成』
  - 5) 橋本輝彦2009「瀬向遺跡発掘調査報告書2-メクリ地区における古墳時代前期墳墓群の調査-」桜井市教育委員会
  - 6) 3次明末2017「瀬向遺跡第186次（二反田古墳第1次）発掘調査報告書」『桜井市平成27年度国庫補助による発掘調査報告書』第46集 桜井市教育委員会  
小田木治太郎ほか2019「二反田古墳の検討」『桜井市平成29年度国庫補助による発掘調査報告書』第49集 桜井市教育委員会
- 上記2つの文献で検討の上、二反田古墳の墳形について前方後方墳である可能性が残されている。
- 7) 青木陽時2014「1.大和古墳群の成立と展開」『大和古墳群1ノミギ古墳』天理市教育委員会
  - 8) 小池香津江1996「芝道跡第17・18次発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報 1995年度』奈良県立歴史考古学研究所
  - 9) 川上洋一2000「瀬向遺跡（第117次調査）」『奈良県遺跡調査概報 1999年度』奈良県立歴史考古学研究所

表3 瀬向遺跡第196次調査 出土土物観察表

調査号	種類	器種	地区・遺構	解説	注目点	法量 (cm)		残存	色調	備考	
						口径	底径(底高)				
図17-1 図14-1	埴輪	坏身	第1トレンチ 築墓上	土層	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、回転ヘラナズリ	11.0	(42)	口縁L/12 全体の1/3	外面：N7/ 灰白色、N5/ 灰色 内面：N7/ 灰白色		
図17-2 図14-2	土師器	小型丸底鉢	第4トレンチ 築墓上	土層	外面：磨滅 内面：ナデ	10.0	(3.6)	口縁L/6 (口縁一帯欠)	外面：2SYR 6-6 橙褐色 内面：2SYR 6-6 橙褐色		
図17-3 図14-3	土師器	1ニメナア 甕	第1トレンチ 築墓上	土層	外面：ナデ、磨サエテ、磨滅 内面：磨サエテ、ナデ	4.7	2.8	7.5-7.6	全体の90% (口縁一帯欠)	外面：2SYR 2R 黄褐色、2SYR 6-6 橙褐色 内面：2SYR 2R 黄褐色、N3/ 暗灰色	
図17-4 図14-4	土師器	高坏	第2トレンチ 築墓上	下層	外面：磨滅 内面：磨滅		(3.8)	坏身破片 1/4	外面：2SYR 6/4 に近い橙褐色 内面：2SYR 6/4 に近い橙褐色		
図17-5 図14-5	土師器	高坏	第2トレンチ 築墓上	下層	外面：面取り磨ミダギ 内面：ナデ、シボリ、ハケ残ナデ		(7.3)	胴部一帯欠 土層	外面：10YR 4-2 灰黄褐色、N3/ 暗灰色 内面：10YR 5/3 に近い黄褐色		
図17-6 図14-6	弥生土器	高坏	第2トレンチ 築墓上	下層	外面：磨滅 内面：磨滅		(9.0)	胴部のみ	外面：2SYR 6-6 橙褐色 内面：2SYR 6-6 橙褐色、N5/ 灰色		
図17-7 図14-7	土師器	高坏	第2トレンチ 積瓦跡		外面：磨滅 内面：磨滅		(3.0)	胴部は1/4欠	外面：5YR 6-6 橙褐色 内面：5YR 6-6 橙褐色		
図17-8 図14-8	弥生土器	甕	第3トレンチ 回内道		外面：ハケ 内面：ナデ、磨サエテ	16.0	(5.2)	口縁L/5	外面：2SYR 6-6 橙褐色、10YR 7/3 に近い黄褐色 内面：2SYR 6-6 橙褐色、10YR 7/3 に近い黄褐色		
図17-9 図14-9	弥生土器	甕	第3トレンチ 回内道	土層	外面：タナキ、ヨコナデ 内面：ハケ	17.0	4.2	14.6	口縁L/6 全体の70%	外面：10YR 5-3 に近い黄褐色、10YR 4-3 に近い黄褐色	
図17-10 図14-10	石部	石磨	第3トレンチ 法衣層				4.2	定形	N 5/ 灰色		
図17-11 図14-11	石部	石碓丁	第3トレンチ 法衣層				(3.0)	全体の90%	2.5GY 5/1 オリーブ灰色		
図18-12 図14-12	鉄製品	鉄片	第1トレンチ 築墓上	下層			(9.7)	断面90%		胴部一帯欠 ている	



## 附載 文殊院北遺跡隣接地の調査報告

### 1. 遺物発見の経緯

平成30年3月頃から、安倍文殊院の北側の丘陵の北斜面において、急傾斜対策に伴う工事がおこなわれ、切土による安全勾配の確保及び擁壁の設置工事が実施されていた。

当該地域の北側には文殊院北遺跡、丘陵部の南麓には特別史跡文殊院西古墳、頂部には後期古墳と考えられる古墳が2～3基あることが確認されており、古墳等の分布が集中している場所であったが、工事がおこなわれた北斜面には、古墳などの遺跡が存在していることは想定していなかった。しかしながら、5月27日に近隣住民より、斜面から須恵器甕が露出しているとの連絡を受け、翌28日に現地を確認したところ、切土がおこなわれている斜面に須恵器甕の底部付近が露出しているのを確認した。よって、周辺を精査し、状況を確認したところ、土壌内に甕が2点埋納されていたことが確認できたため、急遽、地権者の協力を得て記録保存のための発掘調査をおこなった。

平成30年5月28日に、遺構検出及び土器取り上げ、翌29日に図面等を作成し調査を完了した。



図21 文殊院北遺跡隣接地調査地位位置図 (S=1/4,000)

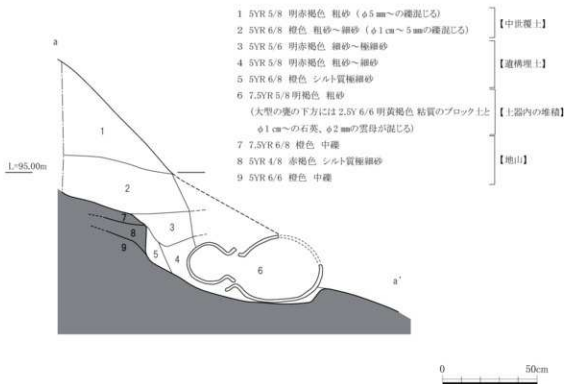
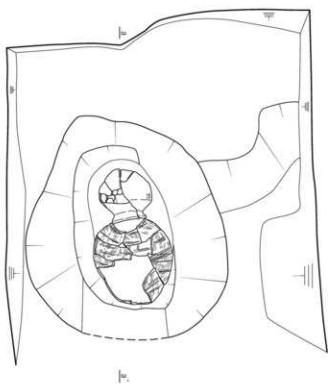


図22 調査区平面・断面図 (S=1/20)

## 2. 調査の成果

先述したように、開発により斜面が削られたことによって、須恵器甕の底部が露出していた。まず、この甕の周辺の斜面を精査し遺構の検出をおこなったが、土器の周辺に明確な遺構を検出できなかった(図版16上)。そこで遺物の取り上げをおこなうため周辺を掘削したところ、露出していた大型の甕の口縁部付近から合口の状態、露出していたものよりは小形の須恵器の甕が出土した。このことから原位置での出土状態であることが想定された。遺構が認識できなかったのは、斜面を覆う上層の覆土が要因と考えられたので、約1.7m×1.5mの調査区を設け、覆土を除去しながら再度遺構検出に努めた。その結果、長径約1.2m、短径約1mの楕円形で、斜面上部から深さ約50cmの掘方を検出した(図22)。甕の規模は、北側の甕が南側のものより大きく、全長45cm、胴部付近の最大径は40cmで、南側の甕は全長28cm、胴部付近の最大径は28cmであった。両方とも須恵質の甕で南側のものは焼成がやや軟質であった。二つの甕は口縁部でぴったりと合わさっており、甕の内部には土が堆積していたが締まりがないもので、流入土だと考えられる。甕内部の土からは石錐が1点出土している。

土壌の規模は、2点の甕を合口で埋納するのに丁度よい寸法で、この二つの甕を埋めるための埋納土壌であったと考えられる。土壌の掘方の埋土からは、甕以外の遺物は出土しなかった。

## 3. 出土遺物(図23、図版18)

出土遺物の内、図化できたのは3点であった。

(1)は大型の甕の口縁部に合わさった状態で出土した須恵器の甕である。口径17.6cm、器高29cmで焼成は軟質であるため磨滅が著しいが、外面はタタキの後にカキ目が施されていた。肩部には焼成後に穿孔がおこなわれている。(2)は大型の須恵器の甕である。復元口径24cm、器高45.5cmで、頸部に

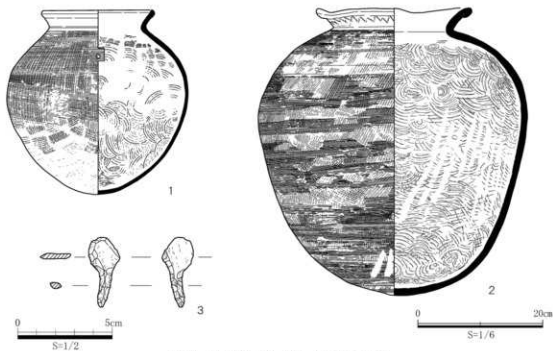


図23 出土遺物 (S=1/6、3のみS=1/2)

は波状文が施されており、体部外面はタタキの後にカキ目が施されている。胴部の一部と、口縁部の半分ほどが欠けている。胴部は、開発時に欠損してしまったものであるが、口縁部に関しては小型の須恵器甕の口縁部に大型の須恵器甕の口縁部が収まった状態で出土しており、2つの甕をうまく組み合わせるため埋納時に打ち砕かれたものと考えられる。須恵器甕から詳細な時期は決め難いが、7世紀代のものであると考えられる。

(3)は(2)の内部に堆積した土の中から出土した縦3.6cm、幅1.7cm～0.5cm、厚さ0.3cmの石鐘である。大型の須恵器甕に堆積していた流入土に混じていたものと考えられる。

#### 4. まとめ

今回発見された遺構は、土木工事中に偶然発見されたものであった。検出した遺構から明確な副葬品などの遺物は出土しなかったが、甕の埋納状況からみると土器棺墓である可能性が考えられる。土器棺墓や土壙墓などは小規模なものであるため、事前に把握することは通常は困難である。それに加え、遺構が見つかった丘陵北斜面は、北側の東西道により大きく地形が改変され、旧地形が残存していないように見える場所であった。地形の起伏の関係で運よく旧地形が残存しており、遺構が残っていたと考えられる。

先述したように調査地周辺には多くの古墳が築造されている。その大部分は、文殊院西古墳や神墓古墳に代表されるように、横穴式石室を内部主体にもつ古墳であるが、調査地の東側でおこなわれた風呂坊古墳群第3・4次の調査では、7世紀の木棺墓や土壙墓、中世の火葬墓などが検出されている<sup>1)</sup>。また、正確な所在地は不明であるが、本調査地周辺と考えられる、昭和33年におこなわれた県営住宅の建設に伴う調査(風呂坊古墳群第1次調査)でも、造成中に合口の土器が見つかったと報告されており、今回と同じく「甕棺」墓の可能性が指摘されている<sup>2)</sup>。このように今回の調査地周辺では、古墳時代以降、時期や形態とも多様な様相をみせながら墓域として利用されていたことがわかっており、今回の成果がその一つの例となる。

今回、不時発見ながらも合口で埋納した須恵器甕の原位置の状態での記録を残せたことは安倍山丘陵の墓域の様相を考える上で大きな成果である。ご協力していただいた地権者および周辺の住民の方々に感謝しつつ、今後の調査研究に役立てなければいけない。

(丹羽・三沢)

#### 【註記】

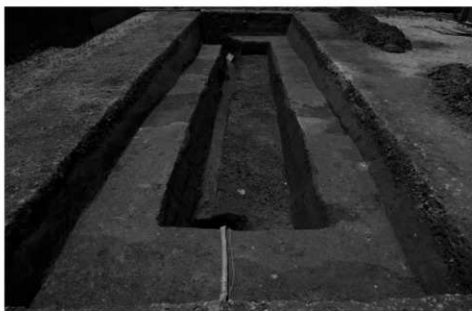
- 1) 福辻 淳2009「風呂坊古墳群第3次発掘調査報告」[桜井市平成19年度国庫補助による発掘調査報告書]第31集 桜井市教育委員会  
福辻 淳2012「桜井市内埋蔵文化財 2008年度発掘調査報告書2 風呂坊古墳群-第4次発掘調査報告書-」(財)桜井市文化財協会
- 2) 伊達宗泰1960「桜井市風呂坊の古墳」[奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編)]第3集 奈良県教育委員会  
小島俊次1958「古墳-桜井市古墳総覧-」桜井市文化叢書1

# 写真図版





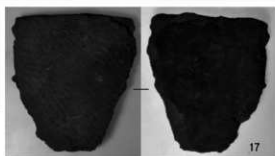
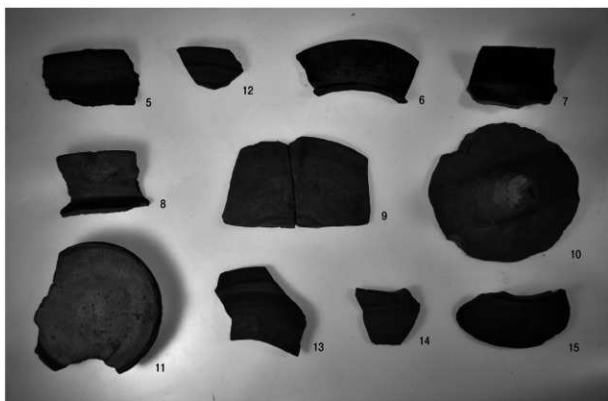
調査前状況(東より)



完掘状況(東より)



南壁断面(北西より)







稲荷山古墳と三輪山（北西より）



稲荷山古墳と箸墓古墳（南西より）

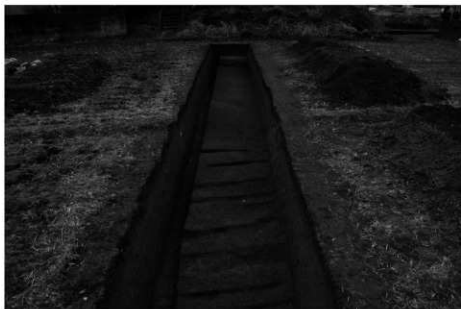


稲荷山古墳と調査トレンチ（上が北）



調査前の稲荷山古墳（東より）

第1トレンチ  
道構検出状況(東より)



第1トレンチ  
道構完掘状況(東より)



第1トレンチ  
全景(上が北)





第1トレンチ  
南壁断面(西より)



第1トレンチ  
SK101断面(東より)



第1トレンチ  
SD102断面(東より)

第2トレンチ  
遺構検出状況(北より)



第2トレンチ  
遺構完掘状況(北より)



第2トレンチ  
全景(上が西)





第2トレンチ  
西壁断面(南より)



第3トレンチ  
遺構検出状況(西より)



第3トレンチ  
全景(上が北)

第3トレンチ  
南壁断面(東より)



第3トレンチ  
南壁断面(西より)



第4トレンチ  
遺構検出状況(東より)





第4トレンチ 道構完掘状況(東より)



第4トレンチ 全景(上が北)



第4トレンチ  
北壁断面(東より)

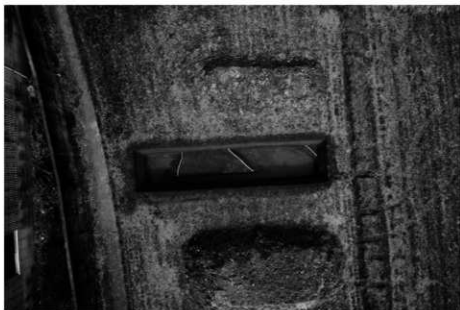


第4トレンチ  
北壁断面(西より)



第4トレンチ  
東壁断面(北より)





第5トレンチ  
全景（上が北）



第5トレンチ  
南壁断面（西より）



第5トレンチ  
SD501断面（南より）

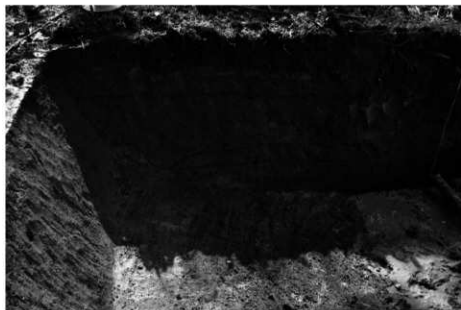
第5トレンチ  
SX502断面(南より)

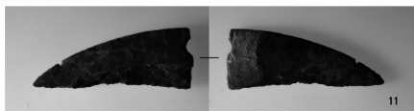
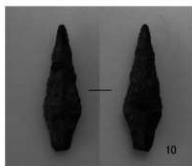
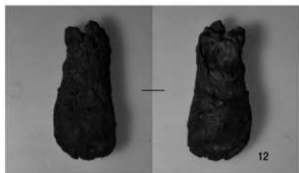
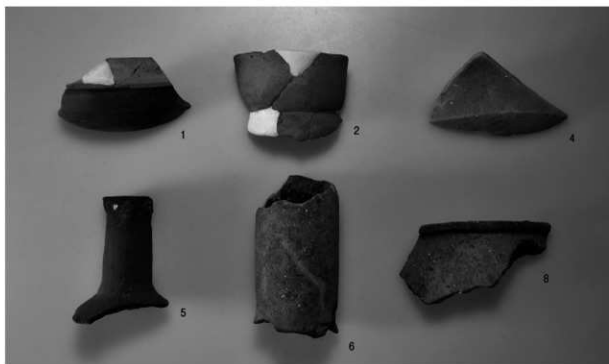


第6トレンチ  
道構検出状況(北より)



第6トレンチ  
西壁断面(東より)





発見時の状況①  
(南東より)



発見時の状況②  
(東より)



発見時の状況③  
(東より)





土器発見時の周辺断面 (東より)



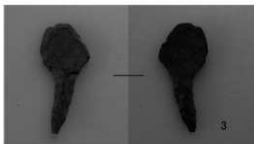
調査地断面 (南東より)



土器出土状況①(南より)



土器出土状況②(南東より)





## 報告書抄録

書名	桜井市 平成30年度国庫補助による発掘調査報告書		
副書名			
巻次			
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ番号	第50集		
執筆者名	丹羽恵二、三沢朋未（編集）、藤村裕美		
編集機関	桜井市教育委員会文化財課		
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2	TEL0744-42-6005	FAX0744-42-1366
発行年月日	2019年12月27日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安倍寺遺跡第18次	安倍木材団地1-129	292061	14B-0028	34°30'10"	135°50'21"	20180618～20180627	60㎡	個人住宅建築に伴う発掘調査
縦向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）	芝1050、1051-1、1052-1、1053-1、1054-2	292061	11D-0487	34°32'12"	135°50'15"	20190123～20190311	169.5㎡	店舗建設に伴う発掘調査
文殊院北遺跡隣接地	阿部645	292061		34°30'15"	135°50'31"	20180527～20180528	2.55㎡	遺跡の不時発見

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
安倍寺遺跡第18次	集落遺跡、遺物散布地	河川堆積	土師器、須恵器、瓦	
縦向遺跡第196次（稲荷山古墳第1次）	集落跡、古墳	墳丘、周濠、旧河道、溝、ピット	弥生土器、石製品、土師器、須恵器、鉄製品	
文殊院北遺跡隣接地		土器棺墓	須恵器甕、石鏃	不時発見

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第50集

桜井市

平成30年度国庫補助による  
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会  
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市大字芝58-2番地

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 令和元年12月27日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464